

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「新出多言語資料からみた敦煌の社会」（平成27年度第3回研究会）

日時：平成28年3月21日（月曜日）午後14時より午後17時30分、22日（火曜日）午前10時より午後16時

場所：大阪大学・豊中キャンパス・文学部本館2階・大会議室

報告者名（所属）

21日

1) 松井太（AA研共同研究員，大阪大学），荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクト全体の進捗について」

プロジェクト全体の進捗状況を確認した。

2) 赤木崇敏（AA研共同研究員，四国学院大学）

「10世紀榆林窟の供養人像の調査報告」

安西榆林窟には帰義軍節度使時代（9～11世紀初頭）に造営・重修された石窟が14窟存在し，寄進・供養を行った節度使やその一族，政権の官員が供養人像として描かれている。この供養人像およびその題記・銘文については過去にいくつかの調査報告が公表されているが，最新のものでも20年以上前であり，しかも質量ともに充分とは言い難い。報告者は2010～2015年の調査で8窟について調査を完了した。今回は，その調査成果をとりまとめ，最終成果報告書の雛形を示した。

3) 坂尻彰宏（AA研共同研究員，大阪大学）

「漢文銘文と供養人像からみた榆林窟と地域社会 —10世紀前後の場合」

本報告では，あらためて榆林窟の基礎的情報を整理し，10世紀前後の榆林窟が，どのような姿で，どのような役割を担っていたかを確認した。その結果，10世紀前後の榆林窟は，主要なものだけを数えれば東崖上層の15窟と下層の1窟，西崖の10窟の全26窟からなり，現在の状態（全42窟）とはかなり異なっていたことが確認できた。また，この合計26窟のうち14窟には節度使等の支配者層の供養人像が描かれており，支配者の功德の為の施設になっていた。さらに，周辺地域の住民の願文や落書きも確認できることから，榆林窟が地域の信仰の拠点となっていたことも分かった。加えて，これら高位者の供養人像が礼拝に訪れた地域住民に見られることで，当該地域の権力のありかを目に見える形であらわしたものになっていたことも指摘できた。

4) 岩本篤志（AA研共同研究員，立正大学）

「国内所蔵中国西域出土文献の研究—国会図書館蔵本を中心に」

日本国内の機関や個人が所蔵する中国西域文献については大谷探検隊将来品や中村不折氏のコレクションを除けば，1990年代に至るまでほとんど詳細が公表されなかった。しかし近年，国内外のほとんどのコレクションの所在があきらかにされ，来歴の研究も進展しつつある。このような環境をふまえ，本発表では国会図書館所蔵の中国西域文献45点の収集経路について検討した。

22日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「2015年12月敦煌西夏文題記調査報告」

2015年12月における莫高窟及び榆林窟の調査活動，特記すべき題記の内容報告と調査の進展状況について述べた。

これまでの調査報告（荒川2010「莫高窟・榆林窟・東千仏洞西夏文題記訳注」、荒川2011, 2012, 2013「西夏文題記に関する覚書」(1～3)）を補足する荒川2016「西夏文題記に関する覚書」(4)から用例を挙げた。具体的には、莫高窟第61窟、莫高窟北第465窟、榆林窟第12窟、榆林窟第20窟、榆林窟第29窟、榆林窟第39窟の題記資料からの抜粋である。

2) 全員

「成果刊行物編集会議」

松井提供の資料を参考に、成果刊行物の内容・構成・各種情報の表示要領やフォーマットについて検討した。

3) 全員

「今後の研究会と調査に関する打ち合わせ」

来年度の研究会の日程、ならびに来年度の調査活動に関する打ち合わせを行った。